壁に掛けられている仔犬のカレンダー。
二匹のゴールデンレトリバーがピトッと寄り添って微睡んでいる写真の下には『2-February-』の文字。
そのすぐ側の、赤ペンで丸囲みされた『4』と『6』、そして無印の『14』の三つの数字を交互に何度も見回した後、ツナは目を伏せて溜息を吐き、ふっと天井を仰いだ。
「眉間に皺寄せて溜息ついて……何かお悩みですか？　若きボンゴレ」
「のわっ!?　お、大人ランボ!?」
本来ここに居るはずのない、でももうすっかり聞き慣れてしまった男の声に慌てて目を開けると、どこか心配そうに覗き込んでくる新緑の瞳と視線がかち合う。
そういえばさっきからランボが周りをうろちょろしていたような気もするが、一体いつの間に10年バズーカを撃ったのだろう。
バズーカの爆音も耳に入らないくらい深く考え込んでいたせいか、ツナは突然のことに事態が把握出来ず目をパチクリさせる。
「ん？」
「え？」
互いに相手の言葉を待つあまり、しばらく無言で見つめ合う形になってしまったが、ランボの視線がふと何かに気付いたように別の方へと向けられた。
それにつられてサッと顔を正面に戻すと、目の前のミニテーブルの上に広げたままにしていた本を取ろうとする、マフィアにしては華奢な手が視界に入る。
「なになに、『初心者さんでも作れるお菓子』に『簡単チョコスイーツレシピ』……あぁ、ディーノ氏への誕生日プレゼントとバレンタインチョコのことで悩んでたんですね。難しい顔をしているから何事かと思いましたよ」
「何事って、私にとっては一大事だよ！　だって生まれて初めて好……って、ちょっと待った！」
「？」
さらりと言うランボに引き摺られ、同じ調子でさらっと返しかけたところでハタと気付く。
何故、ランボの口からあの人の名前が出てきたのだろう。
初めて出会った時からずっと胸に抱いているこの想い。